

対馬市志多留集落における伝統的倉庫建築「小屋」に関する民俗的研究

バートウ サムエル

キーワード：伝統的な生活と建築、離島、農村、人類学、志多留集落、対馬

1. 研究背景

日本国内における多くの地方都市や集落でそうであるように、長崎県・対馬もまた高齢過疎化という社会問題を抱えている。そしてこの問題に起因して、この島では多くの集落や、関連する文化、地域環境に関する知恵が存続の危機にある。島では現在、「対馬島おこし」に参画する団体「一般社団法人ミット」が、対馬内の集落・志多留に拠点を置いて地域活性化のため活動している。また 1950 年代には民俗学者・宮本常一が、この集落で考古学的・文化人類学的な研究を行っている。対馬には、中国や韓国からの影響が強かったために、日本本土とは大きく異なる特徴を有する、木造の倉庫建築「小屋」が存在する。「小屋」は一般的に隣接して複数建築され、「小屋群」を形成し、特殊な建築的景観を作っている。

2. 研究目的と方法

本研究の主たる目的は、対馬における「小屋」を社会文化的・人類学的な視点から理解し、戦後 1950 年代まで残っていた、この地の伝統的な生活の価値を評価することである。現在、高齢過疎化という問題に直面しているこの島の活性化のためには、この伝統的な生活の潜在的な価値を明らかにし、現代の知恵と結び付ける必要があると考えられた。現地調査を民俗学的手法に基づいて行い、また自由回答を含むアンケート・聞き取り調査を、志多留の住民や「対馬島おこし」の関係者に対して行った。また集落や「小屋」の空間構成の原理・法則を理解するため、図面やスケッチを作成し考察を行った。

3. 結果と結論

「小屋」は造船技術と深い関わりを持っていることが分かった。また高床式の形式を有しているため地域の気候と上手く適合し、内部空間の低湿性が食料や衣服を保存するという目的に合致していることが分かった。「小屋」は精神性という点においても、極めて重要な意味を持っている。昔は「小屋」には、集落全体に祝福を捧げる穀霊が存在すると考えられていた。そのため「小屋」が建つ土地自体も神聖なものとして捉えられていた。また、数十年前まで行われていた祭事は伝統的な生活を送る共同体の性質を色濃く映していたものであり、日々の農業活動が、「小屋」の前の広場で行われていたことも明らかになった。不運なことに、「小屋」が使われることはほとんどなくなっており、精神的な信仰も同時に失われてしまっている。現在はものとしての「小屋」だけが、かつての生活の社会的・文化的性質を知る手掛かりとして残っている。